

九十一歳師範、柔の道になお精進 小坂光之介さん

九十一歳の柔道家は、この冬も千種区不老町にある名古屋大学の道場に立ち、現役部員と組み合っている。名大柔道部の師範、小坂光之介さん。岐阜県可児市土田。大正末期の金沢を舞台にした井上靖の自伝的小説「北の海」では、物に動じない浪人生「大天井」として登場する。小坂さんは小説同様に飾り気のないおらかさで、柔道とともに歩いた人生を語った。

小坂さんは金沢生まれ。旧制札幌第二中学時代に出合った柔道にのめり込んだ。当時、高専大会を七回連続で優勝した旧制四高柔道部に入ることだけを目的に、一九二四年春、長い受験生活が始まった。

「北の海」が描いているのは二浪目の二六年。「夏いっぱい道場に通い柔道一本。受験勉強は九月からでした」。生活はほぼ小説のままだったという。二歳下だった井上靖は三年後、四高の柔道部主将になった。

三〇年春、小坂さんは四高生になる夢を果たせないまま浪人生活に終止符を打った。そこに舞い込んで来たのが、四高の正課の柔道教師として採用するという話だった。

「柔道を飯の種にしようとは思ってなかったが、あこがれの四高で柔道ができる。入学したつもりで三年間やってみよう」と引き受けた。二十五歳だった。

入試制度について、小坂さんは「受験勉強は入るための手段。百年も前から役に立たんことはわかっているのに」と首をひねる。

四高に四、五年いた後、新潟中などで十余年、柔道教師を続けた。教え子は名大を含めると千人は下らないという。

四五年、勤労働員で学校に学生はいなくなつたうえ、食料不足なども重なり、親族を頼って可児に転居。戦闘機の部品を造っていた油圧機器製造会社に就職した。

同社の技能訓練所の体育を柔道にしてもらい、工場の中に道場を設けて訓練生に手ほどきした。同時に四高時代の教え子の名大OBに頼まれ、名古屋出張のたびに名大の道場に通った。六十歳で定年となつてから師範として迎えられた。

身長一六〇センチほど。寝技主体の柔道。体格差より練習量が勝負を左右するからだ、という。耳はキクラゲのように変形し、手足の指も「脱ぎゅつしたまま固まった」。

名大師範になつてからは、「いまの若い人はどうですか」とよく聞かれる。答えは「昔も今も変わらない。目標に向かって精進する姿は同じだよ」。

九四年六月、道場で指導中、心筋こうそくで倒れた後は「畳を踏むことが健康の秘けつ」。毎年末、年賀状代わりに出すあいさつ状に、翌年の目標を掲げている。昨年末は「名大柔道部は、もちろん（七大学戦）優勝を目指す。私自身は限界に挑戦する部員に、どこまで援助できるか挑戦したい」。今年も挑戦は続く。